

紅葉の上高地と涸沢

右城 猛

まえがき

「日本一の紅葉を見に行きませんか」と安見夫妻に誘われて、10月9日から3泊4日の日程で涸沢に行ってきた。秋の涸沢は「死ぬ前に一度は見なきゃダメ」というくらい美しい場所。

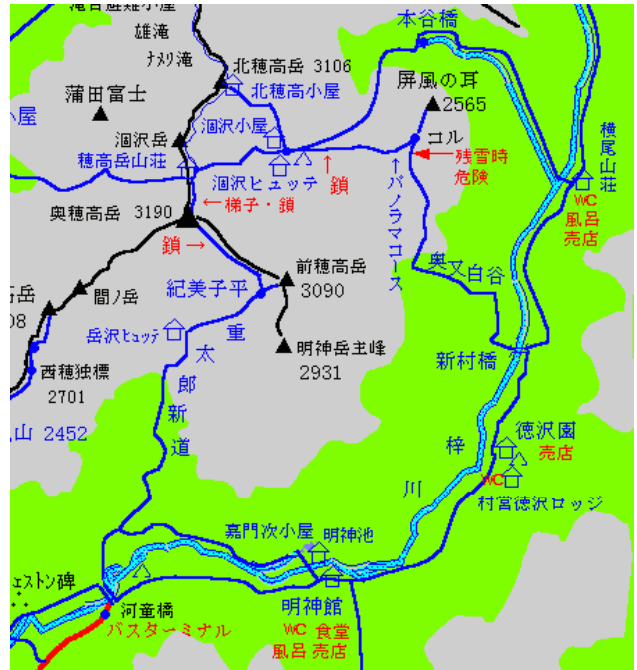
これまでも安見さんと一緒に稲叢山、伊予富士、石鎚山、山嶺、鷲尾山、矢筈山、西赤石山に登っているが、山小屋に泊まる登山は初めての経験であった。

台風18号が8日の5時に知多半島に上陸したので、台風の影響が心配されたが、8日夜の涸沢ヒュッテのホームページを見ると「台風の影響はほとんどありませんでした」と書かれていた。気温は、9月のシルバーウィークのときに氷点下になり凍死者が出たと聞いていたので気になっていたが、昨日の朝が12°C、日中が21°Cということで一安心。

日	行動	宿泊
9日(金)	高知(3:45) 川之江(5:00) (12:10)平湯 (13:20)上高地(13:50) (14:45)明神館 (16:00)徳沢 (17:20)横尾	横尾山荘
10日(土)	横尾(17:10) (8:35)本谷橋(8:50) (11:10)涸沢	涸沢小屋
11日(日)	涸沢(7:00) (9:20)本谷橋 (10:40)横尾 (11:35) (15:00)上高地 (15:25)西糸屋旅館	西糸屋旅館別館
12日(月)	上高地(7:45) 平湯(8:45) (17:30)川之江 高知	

高知から上高地へ

朝の3時45分に自宅を出発。5時に川之江で安見夫妻と合流し、安見さんが最近購入したばかりの新車トヨタ・ハリアーに乗せてもらって高山市奥飛騨温泉郷平湯に行く。平湯到着は12時10分。「ひらゆ乃森」で昼食をとり、あかんだな第2駐車場に。そこからバスで上高地に行く予定であったが、バスとほとんど変わらない料金で行くというのでタクシーに乗る。上高地はマイカーの乗り入れが規制されているのである。



北アルプスの地図(高山登氏のHPより)

上高地到着

上高地は、広義には大正池から横尾までの前後約10kmの平地を指すが、一般には河童橋の周辺が上高地と呼ばれている。



13時20分。上高地のバスターミナルに到着。低公害車両と書かれたバスがたくさん停まっていた。



安見さんが作ってくれた登山計画書をバスターミナルにある「登山届け提出箱」に入れる。登山計画書は、万一遭難した場合の救助の参考にするもので、登山者の氏名、緊急連絡先、行動計画、登山経路図、服装・履物・携行品、行動食、非常食などを書いてある。



バスターミナルから梓川に沿って上流に向けて歩くと、前方に河童橋が見えてきた。



梓川の対岸(右岸)には、上高地西糸屋山荘の本館が見える。最終日に宿泊するのは、ここの別館。



13時45分、河童橋に到着する。あいにく穂高連峰には雲がかかっている。

上高地から横尾山荘へ

上高地から宿泊の予約を入れてある横尾山荘までの道のりは約11km。梓川に沿って左岸側の登山道を上流に向かって歩く。上高地と横尾の標高差は100mしかないなので道の勾配は緩い。



14時、横尾山荘を目指して上高地を出発。



梓川の対岸には明神岳が見える。



14時45分に上高地明神館経到着。背後には明神岳が見える。



驚くほどの透明度の梓川。



16時00分。徳沢キャンプ場に到着。



途中落石防護ネットの工事をしており、梓川の川原が迂回路になっていた。両足の小指が靴擦れして痛い。登山靴は今回の登山に備えてモンベル

の店員に相談して買ったものであったが、私の足に馴染んでいないようである。



17時20分、横尾山荘に到着。河童橋からの所要時間は3時間30分。安見さんの計画では、ヘッドランプで道を照らしながら歩く予定であったが、予想以上に早い時間に着くことができた。



横尾山荘は昨年改築されたようで、想像していたよりもはるかに綺麗であった。

8名定員の2段ベッドの客室。ベッドにはひとつずつカーテンがついている。各自、布団を敷いて寝る準備を済ませて風呂に入る。ここには石が貼られた立派な浴場がある。ただし、環境保護のために石鹸やシャンプーは使用できない。

トイレは様式のエコトイレ。タンクに貯めたし尿を細菌で分解し、さらに土の中へ通して有機物に分解し処理する方式。大便後のトイレトパー

パーは、用意されているポリバケツに入れなければならない。

食事は 19 時まで。風呂から出ると自動販売機で 500ml サイズの缶ビールを買って食堂に入る。歓談しながらの山小屋の食事は楽しい。

食事の後は、用意してきたウイスキーとビーフジャーキーを談話室に持ち込み、消灯時間の 21 時まで 4 人でおしゃべり。

朝の 4 時になると宿泊客が出発の準備をするので騒がしくなる。朝食は 5 時から。



朝の 6 時、朝焼けした前穂高。
横尾から酒沢へ



左手に屏風岩(屏風の耳)を眺めながら歩く。ここはロッククライミングで有名な場所。この絶壁を登るといふから驚きである。



8 時 35 分、本谷橋に到着。写真奥に見えるのは北穂高岳(3106m)



7 時 10 分、横尾山荘を出発。



本谷橋の下の川原に降りて休憩。



梓川に架かった横尾大橋(1999 年施工)を渡る。
振り返ると横尾山荘の上に朝霧がかかっていた。



赤、黄色、緑のコントラストがとても綺麗



石ころがゴロゴロした坂道は歩きづらい



涸沢ヒュッテが見えてきた。ゴールは間近。



岩がゴロゴロした涸れ沢を登っていると泉さんから携帯電話にメールが届く。驚きと感激。



11時10分、ようやく涸沢ヒュッテに到着。横尾山荘から丁度4時間。長かった。写真中央の最も高い尖った山が奥穂高(3190m)が見える。

涸沢(からさわ)

涸沢からは、奥穂高岳(3190m)、涸沢岳、北穂高岳、前穂高岳、西穂高岳など3000m級の山を間近に眺めることができる。これらの峰々からなる穂高連峰を総称して穂高岳と呼ばれている。

穂高岳(3190m)は、飛騨山脈(北アルプス)の代表的な山で、富士山(3776m)、南アルプスの北岳(3193m)に次いで3番目に高い。



常念山脈より見た穂高岳(ウィキペディアより)



涸沢カールのキャンプ場には既にテントが張られていた。対岸には宿泊することになっている涸沢小屋が見える。



さっそく、涸沢ヒュッテのテラスに座っておでんとラーメンを食べながら生ビールで喉を潤す。



今夜宿泊する涸沢小屋に向かう。涸沢には2軒の山小屋がある。1軒は涸沢ヒュッテ、もう1軒が涸沢小屋。安見さんの義兄にあたる仙波さん達のグループが涸沢小屋に泊まっているということで、私達もそこに泊まることにした。



涸沢カールの雪渓。カールとはドイツ語の「Kar」で、「窪み」を意味する言葉。背後の前穂高岳と奥穂高岳の間の垂れ下がった稜線は吊り屋根。



涸沢小屋のテラス。雪が降ってきて寒い。用意してきたダウンのジャケットを着て、その上にカッパを被る。



時間が経つにつれてどんどんテントの数が増えてきた。ダウンの寝袋なら -10℃まで耐えられるというから驚きである。



私たちが泊まった森という部屋。寝床は上下二段になっていた。寝床の広さは上、下とも6畳。壁には赤、黒、緑で数字が3段に書かれていた。1段目が赤色で1~6、2段目が黒色で1~9、3段目が緑色で1~18。

私たちの寝るスペースは緑の数字の6番から9番まで。1枚の布団に3人が並んで寝なさいという意味である。

試してみたが、枕を並べて仰向けに3人が1枚の布団に寝るのは物理的に無理。横になれば可能だがその姿勢で朝まで寝るのは苦しい。そこで、頭を家内と前後にして寝ることにした。

山小屋では宿泊客が枕を並べて寝るということは、映画「劔岳、点の記」を見て知っていたが、一つの布団に3人は想像もしていなかった。

涸沢小屋は定員が120名。そこに約300名が詰めかけた。午後から天候が崩れて雪になったため、北穂高や奥穂高などの山小屋に泊まる予定であった登山客が涸沢ヒュッテと涸沢小屋に詰めかけたのである。

山小屋で宿泊拒否はあり得なく、どんなに混んでいても受け入れるのがルールのようなのである。この日は、食堂も寝床として開放されていた。山小屋には風呂はない。夏であれば他人の汗が臭くてたまらないだろう。夏で無くてラッキー。

宿泊手続きをしたときに渡された紙には、夕食の時間が17時と書かれていた。宿泊客が多いので、順番に食べるように食事の時間を指定しているのである。食堂の入り口には食事中にアルコールを飲まないようにと書かれており、食事は20分以内に済ませるようにという説明があった。

消灯は21時。夜中に何度もトイレに行く。寒くてではなく、グッスリ眠れないためである。イビキの合唱もすごい。そういう私も布団に入るなり高いびきをかいていたようである。寝る前にウイスキーを飲んでいたせいだろうか。

朝3時になると朝食の準備が始められ騒がしくなる。食堂で寝ていた宿泊客は、3時に起こされたようである。

朝食は4時から。10分前に食堂に行くと、既に20名ほどが列になって並んでいた。

朝の5時30分、山小屋のテラスに出ると、広がり雲一つ無い真っ青な空に初冠雪の穂高岳が現れた。

涸沢小屋が一杯なので、ここに泊まるのを嫌って横尾山荘に宿を求めて昨日下山した登山客がいたが、この素晴らしい穂高岳の朝焼けを拝むことができないのはなんとも勿体ないことである。



17時35分。薄暗くなってきた。誰が作ったのかテラスの手摺りに小さな雪だるまが並べられていた。



朝の5時30分の涸沢。奥穂高岳から順番に朝焼けが始まってきた。



5時55分になると太陽が上り周囲がだんだん明るくなってきた。

前穂高岳、吊り尾根、奥穂高岳、涸沢岳がクッキリと見える。



色とりどりのテントが無数に見える。夏のピークの際にはこんなものではない。隙間がないくらいテントが張られる。



涸沢小屋の登り口から北穂高を目指す登山者



北穂高に登る人たち。



初冠雪の奥穂高岳，涸沢岳，

涸沢から下山して上高地へ



7時に涸沢を下山。



途中で氷滴が付いたナナカマドが見られた



9時20分。本谷橋に帰着く。



本谷橋を渡る登山客



10時40分、横尾山荘まで戻る。昼食の時間にはまだ早いですが、朝食が4時であったので腹が空いている。横尾山荘名物のカレーライスを食べる。



横尾山荘のキャンプ地にある地図を見ながら、穂高連峰の説明をする安見さん。



横尾と徳沢の間にある神秘的な沼。

再び上高地

15時。河童橋に帰着く。横尾から3時間25分。足や肩が痛くてゆっくり歩いたつもりであったが、思ったほどは時間がかかっていない。



観光客や登山客で溢れる河童橋左岸の袂には「神河内五千尺ホテル」がある。「神河内」とは、上高地の昔の名称。河内が高知になったのとよく似ている。「五千尺」の名前は、上高地の標高1,500m(=約5,000尺)に由来している。

五千尺ホテルの横は土産物店。朝も7時頃から既に営業していた。



15時25分、上高地西糸屋山荘別館に到着。本館に比べて値段が安いので、登山客の多くは別館を利用されるようである。

私たちが泊まったのは定員8人の部屋。4人が寝られる二段ベッドと6畳の和室になっていた。

風呂は本館に温泉があり、窓の外の穂高岳を眺めながら浴槽に浸ることができる。素晴らしいロケーションにある。

涸沢小屋に比べると天国。一つの布団を独占できる幸せを、風呂に浸かって疲れを癒せることができることをとても贅沢に思えた。



食堂で安見さんの義兄のグループ(松山の山の会)と一緒に食事。写真左から中野さん,近藤さん,矢野さん。



写真左から篠原さん,仙波さん,安見さんと私



6時,朝風呂に入ると,誰もが浴槽に浸かって黙って窓の外に見入っていた。窓の外には朝焼けした穂高岳が美しい姿を現していたのである。

朝の6時30分,山荘の外に出ると,梓川に朝靄がたちこめてとてもなんとも神秘的な風景が目に入ってきた。上流に見えるのは河童橋と五千尺ホテル。



河童橋に行くと,上高地で宿泊していた登山客や観光客が,橋の上から穂高連峰の朝焼けをカメラに納めていた。



絵はがきのように美しい梓川と穂高岳



河童橋と穂高岳



写真中央に見える山はジャンダルム



河童橋と穂高岳



河童橋から梓川の下流を眺めると焼岳が見える

上高地を後にして



朝食を済ませ 7 時 45 分に西糸屋山荘をチェックアウト。バスターミナルに向かう。

上高地に来るときに乗ったタクシーの運転手の携帯電話番号を聞いていたので電話をする。約束通り、バスの料金と同じ一人 1000 円であかんだな駐車場まで乗せてくれた。バスであれば平湯のバスターミナルからあかんだな駐車場までシャトルバスで移動しなければならないので時間がかかるが、タクシーは直接駐車場まで行ってく

れるので助かる。

運転手の知識の豊富さには驚かされた。辛口のしゃべりで話が面白かったのであつと言う間にあかんだな駐車場に着いていた。



あかんだな駐車場のバス停のトイレで用をたして帰る準備。



これが安見さんの愛車トヨタ・ハリアー。中が広いので長距離を乗っていても疲れな。帰りは、仙波さんも加わり 5 名で帰る。あかんだな第 2 駐車場を 8 時 45 分に出発する。



17:30 分。無事に川之江に到着する。

安見様、奥様の千春様、仙波様それに近藤様、篠原様、中野様、矢野様本当にお世話になりました。心より感謝を申し上げます。

【2009 年 10 月 25 日記】